

F-16 中流意識の構造 — ライフスタイルを中心として —

香蘭女短大 ○齋藤梨子 高良治江 久保加津代

目的 中流意識が国民の大半を占めたという。人びとが中流意識をどのようにとらえ、中流意識をもつ者がどのような生活の価値観をもち、また、かれらがどの程度の生活水準に満足しているのかを、各生活領域にわたって明らかにする。

方法 福岡市内に居住する主婦 800名を対象に、質問紙留置法による意識調査。

結果 すでに多くの調査が示すように、中流帰属意識は圧倒的に強かった。かれらは中流階層と、学歴や資産や社会的地位の高低にかかわらず、人並みの収入があり、教養を身につけ、できれば持家のある人々とイメージしている。かれらの生活満足度は概して高いが、教育、余暇、住居に対する不満がやや目立ち、食生活については満足度が高い割りに負担感が強い。これに見合せて、今後充実したい生活領域は住居と教育で、貯蓄の目的も主として子どもの教育と老後の生活の安定におかれている。いいかえれば、老後に安心して暮らせるだけの貯えがあり、子どもに高等教育を受けさせられる生活が、かれらの生活の理想像である。なお政治意識と中流帰属意識との間にとくに顕著な相関関係はみられない。

以上のことから、いわゆる中産階級は、戦前の身分階層秩序の崩壊と戦後の経済成長がもたらした生活水準の一般的な向上と生活の価値観の平準化のたまものということができる。しかし、かれらが意識すると否とにかかわらず、学歴、職業、社会的地位への関心は高く、収入の多寡とも関連するこれらの要因による階層帰属の世代間流動性と老後の生活保障の欠如とは、かれらの競争心と不安感を増大している。